

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（１）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide01/

——免疫チェックポイントって何だ？——

「現代免疫物語beyond 免疫が挑むがん難病」
（岸本忠三・中嶋彰 講談社ブルーバックス 1080円税別
2016年1月刊）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドさせていただくことになりました。査定歴20年の自称「査定職人 ドクター・ホンタナ」です。

第一回は巷で話題の免疫チェックポイント阻害による抗がん剤「オプジーボ」のことがすっきりわかる一冊です。20世紀の間は「がん免疫療法」というものはいかにもうさん臭いものでした。丸山ワクチン、ピシバニール、クレスチンなどなど。うさん臭さの根底には、効果があるというのに、その作用機序がナゾということではなかったでしょう。うか。そもそも免疫機構そのものがまだまだ漠然としていた時代でした。ところがヒトゲノム計画以降のバイオテクノロジーの発達は、リンパ球の細分類を可能にし、様々なリンパ球の働き、それを実現する分子機構を明らかにしました。21世紀になって一気にすすんだ分野です。一方で、「がん」の分子病理学もおなじテクノロジーによって急速に進歩しました。EGFRやALKのような、がん細胞表面に現れるレセプタータンパクなどの遺伝子異常が明らかになり、その部分を攻撃する分子標的抗がん剤が抗体医薬として開発される時代がきたのです。

そして、「リンパ球によるがん認識」と「分子標的」という二つの最先端を組み合わせたものがオプジーボ（ニボルマブ）です。本書は、リンパ球研究の黎明期からオプジーボまで、多くの研究者の人生遍歴をからめながら、そのすべてがまるで小説を読むように理解できるという稀有な一冊です。このあたりのことまったくわからないという人にこそ薦めたい。読み終わったあなたは、きっと誰かに薦めずにはいられなくなるでしょう。

著者二人のコンビでブルーバックスから「現代免疫物語」「新・現代免疫物語」に続く第三弾として出版された「現代免疫物語beyond」ですが、まずは第三弾の本書を読んでみてください。

本書だけであなたは現代免疫学の最先端に触れることができることうけあいです。

（byホンタナ ペンネームの由来は追々・・・ 2017年7月）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（２）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide02/

——難病Xである確率は？——

図解・ベイズ統計「超」入門

あいまいなデータから未来を予測する技術

（涌井 貞美 サイエンス・アイ新書 SBクリエイティブ）

1200円税別 2013年6月刊）

気楽に読んで査定力アップ！ブックレビューのドクター・ホンタナです。2回目は「ベイズの定理」、いまやこれなしでは査定できませんよね（？）。人間ドックでさまざまな検査がやられるようになって、例えば抗p53抗体やCYFRA（シフラ）、古いところではリウマチ因子や抗核抗体、これらが陽性のときの判断に困っていませんか。これまでの疫学的な考え方でも、陽性、偽陽性、尤度ということばを使って解説されてきましたが、もっと数学的に表現しようと思えば「ベイズの定理」を使うのが早道です。

（問題）1万人に1人が発病するようなある難病X。Xの最新の診断法AではXの患者は100%が検査で陽性になり、Xでない場合の偽陽性率は2%・・とします。人間ドックでAの検査を受けて陽性だった人がXである確率は？

（答）0.5%。（直感よりはだいぶ低いのではないのでしょうか）

このA陽性の被保険者をひきうけるかどうかはこの0.5%をどう考えるかということになります。この難病Xの問題にしても有名なモンティ・ホール問題にしても人間の直感にはなんとなくしっくりこないのがおもしろいところです。そこでしっくり納得するために「ベイズの定理」です。ただ、本来しっくりこないだけに数学的な本はわかりにくい。そこで今回紹介するのがマンガの豊富な「図解・ベイズ統計「超」入門」です。これ一冊とにかく読んでください。99%理解できます（偽理解率5%）・・・。

世の中、唾液や血液1滴で数十種類のがんがわかる、なんて診断法があふれていますが、スクリーニング検査で偽陽性率が高ければ（実際高そうですが）被験者を不安にするだけで百害あって一利なしです。査定者も難病Xの1%以下の可能性にビビって、バンバン謝絶していませんか？マンガでいいですから、「ベイズの定理」勉強しましょう。ベイズの定理をネタにつかった垣根涼介の小説「光秀の定理」（角川文庫）を事前に読むと事前興味確率が高まりそうです。（by 査定職人 ドクター・ホンタナ、2017年7月）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（3）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide03/

——日本人は特殊？——

欧米人とはこんなに違った日本人の「体質」

科学的事実が教える正しいがん・生活習慣病予防

（奥田昌子 講談社ブルーバックス 900円税別 2016年12月刊）

日本では査定するときには人種による違いをあんまり意識していませんが、日本人以外の在日居住者が保険に加入してくるケースが増えてくると健康や身体の人種差を考えないでいいのか・・・と思いますよね。その裏がえしで、ブラッケンリッジを手本にして査定していると、知らないうちに欧米のそれも白人を対象に作られた査定基準をそのまま日本人に当てはめている場合も多く、それはそれでいいのかと思うことも。また、外資系の再保険会社は日本人の健康の特殊性ってどれくらい意識しているのでしょうか。

今回紹介するこの本は、健康の人種差、つまり「日本人の健康や疾病の特殊性」にフォーカスをあてています。著者の奥田先生はテレビ「世界一受けたい授業」ほかマスコミで見ることも多く、本書も発売6ヶ月ですでに8刷と売れています。タイトルからは世間にあふれるなんちゃって健康本？と感じられるかもしれませんが、そこはブルーバックス。読んでみるとけっこうマジメに、きちんと論文を引用しながら、かつコンパクトに、「総論」「糖尿病」「高血圧」「脂質異常症」「がん（とくに、胃がん・大腸がん・乳がん）」という章立てで、日本人と欧米人の違いをまとめてくれています。血圧や脂質などいわゆる数値項目の査定基準を改定しようと思う場合に一読しておく役立ちます。

引受査定をしていると、21世紀になって100キロオーバーの肥満に遭遇することが激増してきたと実感しますが、そのあたりも日本人の特殊性で説明できそうです。また、単なる特殊論で終わるのではなく、それが海に囲まれた国土におけるエピジェネティックな遺伝子変化によって起こったのだという科学的理論付けも納得感あります。

「目からうろこ」というまでの内容ではありませんが、「日本人の健康・疾病面での特殊性をすっきりまとめてくれた、それも参考資料と参考URL付きで！」というところでしょうか。短時間で読めますので後悔はない一冊です。

（by 査定職人 ホンタナDr. Fontana 2017年8月）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（４）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide04/

——夏祭り、カレーと言えば——

「悲素」

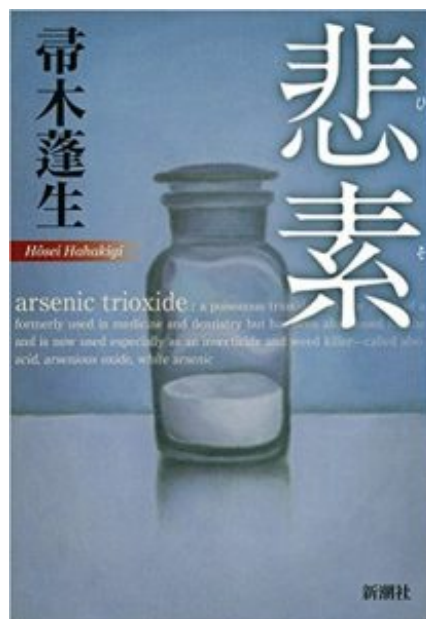
（帚木 蓬生 著 新潮社 2000円＋税 2015年7月刊行）

夏が来れば思い出す・・・和歌山毒物カレー事件が起こったのは1998年7月、もう20年近くになります（ああ、もうこの事件を知らない業界人もいるのじゃないかな）。被疑者・林眞須美は2005年に最高裁で死刑が確定しているのです。すでに死刑囚ですが今も大阪拘置所に収監中です。被疑者やその母親が生保の営業職員だったことや夫（保険金詐欺で逮捕、刑が確定しすでに服役をすませ出所済み）が高度障害保険金を受け取った後にもまた新たな保険に加入できていたこと、などなど、生命保険や損害保険との関わりも当時話題になりました。このまま風化してしまう前にということでしょう、タイトルも「悲素（ひそ）」としてこの事件を記録するセミ・ドキュメンタリーが出版されています。これこそ医学と生命保険の両方に関わっているわれわれこそが読んでおくべき一冊です。

「悲素」は「三たびの海峡」などの作品で知られ精神科医でもある帚木 蓬生（はわきぎ ほうせい）氏の久しぶりの医学小説です。帚木氏が地元の医師仲間でもある井上尚英九州大学名誉教授からカレー事件やサリン事件に捜査協力した際の鑑定資料一式を託されたことが執筆のきっかけです。井上尚英先生は日本に数少ないヒ素中毒の第一人者でもあり、その彼に和歌山県警から極秘の鑑定依頼があった1998年8月から2009年5月の死刑確定前後までを小説として描きます。

カレー事件だけでなく、17世紀にイタリアで販売された初の毒物「トッファーナ水」や、毒殺史を塗り替えた「マリー・ラファルジュ事件」、またヒ素による自殺を克明に描写した「ボヴァリー夫人」やアガサ・クリスティ「蒼ざめた馬」を読んだ毒殺魔グレーム・ヤングのエピソード、さらには、タリウムやサリンなど日本の毒物事件の詳しい解説もあり、毒物と犯罪の歴史を学ぶこともできます。

安易に高度障害保険金の診断書を書く医師の存在、被疑者が保険のしくみ、特に支払われる際の査定の抜け穴を知りつくしていることなど、われわれ査定者も認識しておくべきことがたくさんあります。保険の販売チャンネルが多様化し販売サイドのロイヤルティが期待しにくくなりつつある今こそこうした事件の記録から学ぶことは多いでしょう。（by 査定職人 ホンタナDr. Fontana 2017年9月）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（５）

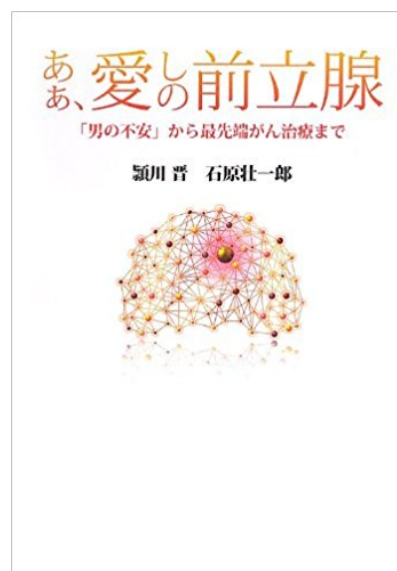
uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide05/

——前立腺 長い間ありがとう！？——

ああ、愛しの前立腺

「男の不安」から最先端がん治療まで

（颯川 晋・石原 壮一郎、小学館 1300円税別 2013年8月刊行）



高齢化やP S Aスクリーニングの普及で激増している前立腺がんですが、男性読者のみなさん、あなたのご自分の前立腺・・・意識していますか？前立腺の役目、P S Aの働き、正しく理解してますか？つい最近までは、私にとってもどこか遠い前立腺・・・泌尿器科出身の先生以外にとっては、また女性のみなさんにはもっと、わけわからないものではないでしょうか。そこで、一般書でわかりやすく情報も豊富な「ああ、愛しの前立腺」を紹介します。私は今、

2時間ほどで読み終わってみて、これまでの人生をともにがんばってきたわが前立腺に「ごろうさま、これからもよろしく」と語りかけたい気分になりました。何かがご苦労様なのかここに書くことははばかられますが、若いころは若いなりに、歳をとってきからはまたそれなりに、あんなできごと、こんなできごと、前立腺とともに生きてきたんだなあ、そんな感慨必至です。読めばわかります（男性にかぎりますが）。

本書はいわばシロウトの石原さんという50代コラムニストが前立腺の内視鏡手術の第一人者慈恵医大の颯川先生にインタビューするという形式なので、本当に読みやすく、それでいてツボはきちんと押さえられています。P S A検査を受ける心構えなや、基準値がどうやってきめられているのかなどなど。また、前立腺肥大と前立腺がんがまったく無関係というのは恥ずかしながら知りませんでした。査定に生かせそうです。あと、前立腺がんの骨転移巣はほかのがんが破骨的なのとは異なり造骨的なので痛むのだとか。

また、歴史的に、有名人が前立腺がんになったというニュースがあるとP S A検査を受け人が増えてがんが見つかる数が激増するらしいです。ジュリアーニ元ニューヨーク市長ではアメリカで、今上天皇陛下69歳のときの手術では日本で前立腺がんブームになったそうです。

気になる前立腺手術を受けた後の機能についてもこれ以上の説明はないというくらいわかりやすく書かれています。男性なら皆、そして女性の査定者も、前立腺にもっと愛を・・・。（by 査定職人 ホンタナDr. Fontana 2017年9月）

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（6）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide06/

——人口の過去・未来の人口——

日本の少子化 百年の迷走

人口をめぐる「静かなる戦争」

（河合雅司 新潮選書 1400円税別 2015年12月刊）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドさせていただくことになりました。査定歴20年の自称「査定職人 ドクター・ホンタナ」です。

今回のブックガイドは査定を離れて、保険業の将来を左右するかもしれない日本の人口をテーマに。実は最近

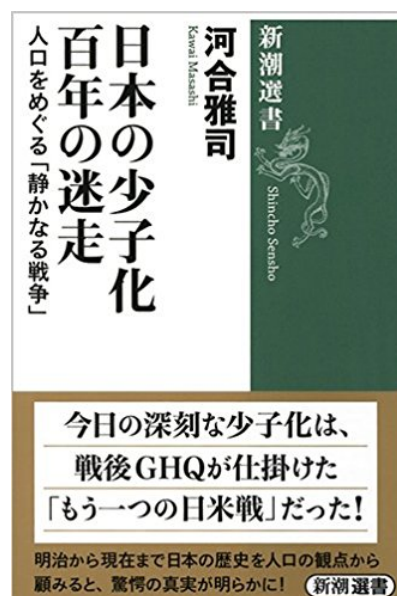
（2017年7月）同じ著者で「未来の年表 人口減少日本でこれから起きること」（講談社現代新書）というのが出版され人気があるようなのですが、読んでみるとこれがなんと

も薄い内容で、同じ著者の「日本の少子化 百年の迷走」を読んで感心していた私としては非常に残念。そこで、この機会にこちらのほうをレビューしておすすめすることに。

「未来の年表」が日本の人口の将来予測をもとにありふれた悲観論を並べているのに対して、こちらは終戦からベビーブームの時代に将来の人口爆発を予測して何が行われたかという、つまり人口の過去を検証しています。過去の出来事だけに、リアリティもあれば数々の証拠も掲げられています。私はこの本で長年の疑問が氷解しました。それは「団塊の世代を作ったあのベビーブームが急に終わったのはなぜ？」という疑問です。私はポスト団塊世代なので当時（昭和25年前後）の世の中がどうドライブされていたのか実体験はできませんでしたが、この本を読むとそれがスッキリわかります。

あまりネタバレするのもアレですので、そのうち一つだけ「優生保護法改正による人工妊娠中絶の実質自由化！」、そこにはメシの種を探していた医師もけっこうからんでいます。当時は戦争末期に濫造した軍医が大挙して復員してきて空前の医師過剰の時代だったんですね。バブル期に定年を迎えつつあったたくさんの社医先生も同じ世代です。産婦人科ブームでもあったわけです。

しかし、本書でもわかるように、近代以降は常に人口爆発こそが人類の脅威だったわけで、世界的にはこれからもそうでしょう。人口減少日本の悩みなんて贅沢な話なのかもしれません。戦争に向かう人口爆発については「日米戦争はなぜ勃発したか—メシの問題からみた昭和史と現代日本」（高橋英之）がおすすめです。今回出てきた3冊で日本の人口知識はバッチリ！？（査定職人 ホンタナDr. Fontana 2017年9月）



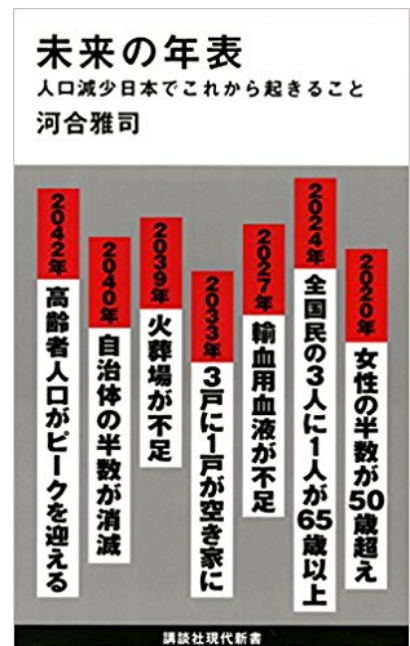
関連本・サイトなど

未来の年表 人口減少日本でこれから起きること

(河合雅司 講談社現代新書 760円税別 2017年6月刊)

日米戦争はなぜ勃発したか—メシの問題からみた昭和史と現代日本

(高橋 英之 社会評論社 1700円税別 2008年7月刊)



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（７）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide07/

——すべての病気は糖尿病に！——

アルツハイマー病は「脳の糖尿病」

2つの「国民病」を結ぶ驚きのメカニズム

（鬼頭 昭三・新郷 明子 講談社ブルーバックス 920円税別

2017年7月刊）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称「査定職人 ドクター・ホンタナ」です。さて今回は・・・

認知症700万人時代。超高齢社会を背景に認知症を取り上げた本が増えていますね。患者・介護者・医師・研究者とさまざまな書き手がさまざまな立場で書くのでやや混乱気味です。また糖尿病についても低糖質ダイエットのからみで論争があります。どんな本でも書き手の立場を考えながら読まないで偏った考えを植え付けられる・・・本を読むのも怖い時代になりました。

そんな2つの病気、アルツハイマー病と糖尿病に関連がある、ということはここ10年位の間に久山町研究などで統計的に明らかにされています。いよいよそれが細胞レベルの代謝メカニズムで解明されてきたというのが本書の主旨。「神経細胞のインスリン抵抗性こそがアルツハイマー病の原因である」ことを著者らのこれまでの研究をなぞって解説してくれます。こういう著者の専門分野紹介モノの本にはどうしても手前味噌っぽい記述が多く、読んでいて、周知の事実なのか著者らの主張なのか、区別がつけにくいという欠点があり、主張に沿った事実しか語られていないのではないかと・・・という読み方もできると思います。（査定者にはそういう読みのセンスも必要ですが・・・）。

とは、言うものの、アルツハイマー病の現在の治療薬、糖尿病の現在の治療薬を総覧してくれており、アルツハイマー病と糖尿病の関連の中でどう治療をすすめて行くべきなのかということがスッキリとまとめられており役立ちます。新薬が続々発売され「糖尿病治療のいま」が見えにくくなっていますが、そこがアルツハイマー病とからめることで腑に落ちるかたちで理解できました。代謝疾患の本って患者向けのレベルのものかガイドライン的な面白くないものというのが相場ですが、ちょっとテーマがひねられているので面白く読めます。サブタイトルにある「驚きの・・・」は大げさですが。

本筋からはずれませんが、少量継続飲酒（毎日晚酌をするような行為）がいかにアルツハイマー病リスクを高めるかということが繰り返し書かれており、査定職人ホンタナもビビって休肝してしまいました（2－3日ではありますが・・・）。

（査定職人 ホンタナDr. Fontana 2017年10月）



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（８）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide08/

——肥満学習にNHKはいかが？——

「加速する肥満」

なぜ太ってはダメなのか

（D・バレット著 NTT出版 2200円税別 2010年5月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドをおとどけしています。査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。

引受査定していると、ここ数年100キロオーバーの体重が決してめずらしくないですよ。私が査定を始めた20年前には体格で条件付というのは比較的まれだったのに、いつからこんなことに。確かに、町なかでも病的肥満（？）を頻繁に目にするようになりました。そんなわけでいくつか肥満本を読んでみました・・・が、どうもピンとくるものが少ない。岩波新書「人はなぜ太るのか—肥満を科学する」（岡田正彦 2006年）、ブルーバックス「食欲の科学」（櫻井武 2012年）、それに今回タイトルがセンセーショナルということでトップにあげた「加速する肥満」、BMIの話、レプチンやアディポネクチンの話、糖質ダイエットの話、さまざまなバリエーションはあるものの、どれも「膝を打つ」ほどのインパクトはありません。どの本にも書かれていることは「肥満の研究はむずかしい」ということ。あまりにも関わる要素が多すぎ、くっきりとした因果関係を明らかにすることができないというわけです。人類は、「飢餓の時代」→「充足の時代」→「肥満の時代」へと進んでいるわけですが、同時に科学・医学の進歩もあるので、肥満＝短命とはいかないところもまた難しい。

「むずかしい、むずかしい、わからない」ではブックガイドになりません（まあ冒頭に挙げた「加速する肥満」をざっと読めば十分でしょうが）ので、今回のテーマにぴったりのテレビ番組を緊急告知しておきます。NHKスペシャル「シリーズ人体」の第2集「脂肪と筋肉」の会話がメタボを治す」（2017年11月5日（日）21：00～）です。10月からはじまった全8回のこのシリーズ、映像的にはなかなかのできで、アンダーライティングをされている皆さんにはお薦めです！まだ放送前ですが肥満に関わる11月5日の番組を是非みてみようではありませんか。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2017年10月）



関連本・サイトなど



第 2 集

“脂肪と筋肉”の会話がメタボを治す

2017年11月5日(日) 21時 ~ (49分)

NHKスペシャル「シリーズ人体」

ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（９）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide09/

——しかし、ほとんどはこの30年のできごと——

がん-4000年の歴史（上）

シッダールタ ムカジー

（ハヤカワ文庫NF 920円 税別 2016年6月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています。査定歴20年の自称「査定職人 ドクター・ホンタナ」です。さて今回は・・・大作です！（きっぱり）

目の前の告知書や診断書、そこに書かれている医療はまさに今、日本で行われている医療です。たとえば、私が1986年に医師免許をいただいてからの30年の間にさまざまなイノベーションがありました。臨床医のときはそれをリアルなものとして学び受け入れてきましたし、保険の世界にはいつてからは、医事新報やMedicinaなどなど雑誌を読んだりすることで知識をリニューアルしてきました。日進月歩のせわしない毎日です。これまではそんな状態を、まさに最近の急激な医学の発展のせいだと思っていました（皆さんもそうですよね？）。

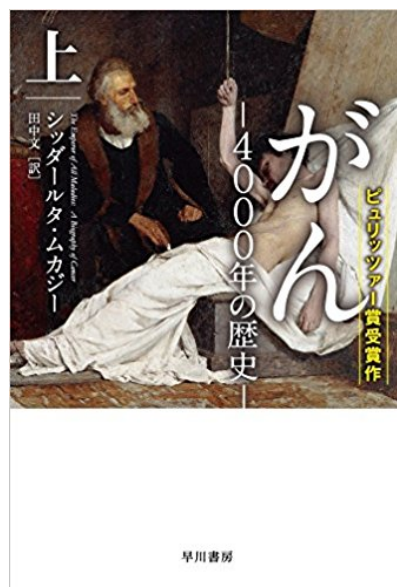
その思いが「今を生きていることによる思い上がりではないか？」と、ハッと気づかせてくれた本が今日紹介する「がん-4000年の歴史」です。文庫本で上下あわせて千ページの大作です。これを読むと、病気と人間の闘いの歴史は、有史以来、人間の側が不断にイノベーションし続けることで進んできた、ということが強く実感できます。自分が医学部で学んでいたそのときも医学は静止状態にあったわけではなく、今と同じように激しいイノベーションの途中だったということです。

しかし、医学教育では、いったんはその時点のスタンダードを教え・学ぶしかない。しかし、そうすると学んだ側は自分の学んだスタンダードをまさに医学のスタンダードと思い込んでしまう。これはアンダーライターでも同じだと思います。しかし医学はstatic（静的）なものではありえない、それを肝に銘じなければなりません。

私が学んだ古典的ながん化学療法・過大な根治的外科手術、それらが合理的・科学的な最新の治療に取って代わられていった、どれもこれもこの30年ぐらいのできごとなのですから、自分がいかに新知識を学ぶことに対して怠惰であったか思い知らされました。

スマホが毎年のように新機能を備えてリニューアルされるのと同じように、医学・医療もリニューアルし続けています。数年前の旧モデルのスマホが使い物にならないように、10年前の医学も使いものにならない。自分自身をニューモデルに置き換えることができないじょうは、自分の頭を自分自身の不断の努力でリニューアルし続けるしかない・・・そんな気づきの一冊（いや二冊）です。必読。

ピューリツァ賞受賞作。著者はインド系アメリカ人ですが、彼以外でもインド系の医師の書いた医療本が増えてきてアメリカ医療のインド化（？）を感じます。（査定職人 ホンタナ Dr. Fontana 2017年11月）



関連本

がん-4000年の歴史（下）

シッダールタ ムカジー

（ハヤカワ文庫NF 920円 税別 2016年6月刊行）

（注）本書は2013年に単行本として刊行された『病の皇帝
「がん」に挑む 人類4000年の苦闘』（早川書房）を改題・
文庫化したものです。英語原書の「The Emperor of All
Maladies」のKindle版は11月3日時点で200円でダウンロード
できます。



ブックガイド 気楽に読んで査定力アップ！（10）

uuwroom.com/satei-info-kokunai/sanko-kokunai/bookguide10/

——ワセダクロニクルへの道——

「医療者が語る答えなき世界」

「いのちの守り人」の人類学

（磯野真穂 ちくま新書 800円税別 2017年6月刊行）

気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新の医学知識をゲットしよう。そんなコンセプトでブックガイドしています、査定歴20年の自称査定職人ドクター・ホンタナ（ペンネーム）です。

今回紹介するのは、文化人類学をやっている女性がさまざまな局面で見られる医療の不確実性を描いた「医療者が語る答えなき世界」。最近、こうした文系研究者が自分の研究分野のこれまで書いた文章をまとめて新書の形で出版した・・・というものに出くわすことが増えています。

「医療」と「答えなき世界」でタイトル買いしてしまいましたが、タイトルにふさわしいのは3部構成の第2部だけ、それも「ダビガトラン騒動」の部分以外は著者の印象の開陳にすぎないんじゃないのという内容で、ちょっと期待はずれでもありました。

それでもこの本を取り上げたのはこの「ダビガトラン騒動」を描いた20ページ部分が巻末の解説や引用文献も含めてかなり興味深いからです。特にネタ元と思われるワセダクロニクルの「買われた記事」のサイトは、「新聞や雑誌の医療系の記事が、実はスポンサーが新薬や新製品を売り込むことを目的に金をだして書かせている」ことを如実に示しています。一見、客観的なものと考えてしまいそうな新聞記事さえもが「買われて」いるという事実、

「やっぱりなあ」という感想もですが、「何を信用していいのかわからない」という現代的混迷の中で生きているという現実に不安を覚えます。薬のことが書かれていたら「これって広告なんじゃないの？」と疑ってかからないといけない時代です。

非ワーファリン系の抗凝固剤（NOAC、ダビガトランやリバーロキサバン）が一時期ワッと評判になりましたが、広告活動が急に目立たなくなった理由はこうした調査報道の成果なのかもしれません。ところある臨床医は高齢者にはワーファリンのほうをすすめるでしょうね、儲かりませんけど。まさに薬の世界はヤミ・・・ですねえ。本書は上記20ページを立ち読みするだけでもいいと思いますが、ワセダクロニクルのサイトは必読です。

巷では、パナマ文書やパラダイス文書が「調査報道」として公表されて話題になっていますが、ワセダクロニクルは早稲田大学ジャーナリズム研究所がこの「調査報道」なるものを実践すべく展開しているようです。その第一弾が「製薬メーカーと広告代理店に踊らされる現在の医療界の実態」というわけで、記事はなかなか良質です。医師として、アンダーライ



ターとしてだけでなく、賢い消費者としても必読のサイトです。今回はブックガイドならぬ
サイトガイドになってしまいましたが、まあこうした展開も読書の醍醐味ですね。（査定職
人 ホンタナ Dr. Fontana 2017年11月）

関連サイト

ワセダクロニクル

<http://www.wasedachronicle.org/>

